

クシャン朝ブツダ立像銅貨(1)

—図像について—

吉池孝一

1.当館所蔵のブツダ立像銅貨

当館所蔵の第4代王カニシカ1世のブツダ立像銅貨を紹介する。最大径は26.6mm、厚さは4.8mm、重さは17.0g。材質は銅とみられる。撮影は著者。



表



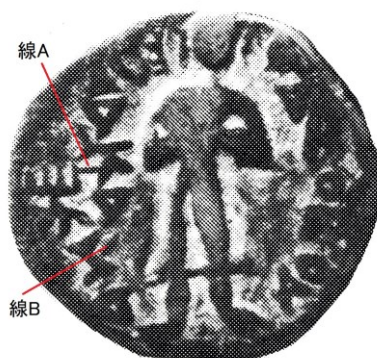
裏



2.当館コインの真贋

かつて、吉池孝一(2016)で、当館コインは、後代の作である可能性があったとした。二カ所に不要と思われる線があり、その線が Göbl (1984:78)の786-1番にも共通して現れることを

根拠とした。Göbl (1984)の画像の二カ所の線を、線 A、線 B として提示すると次の通り。



しかしその後、2本の線の内、線 B は衣服のひだの一部と判断し得ると考えるに至った。他の1本の線 A については、いまのところ説明は困難である。次に線 A に関わる画像の一部を挙げる。銘文 SAKAMANO の KA の部分を、45度左に倒して提示する。白線でなぞった KA の K の下に、共通して縦線がある。この線は、私には不要に見える。



当館蔵



Göbl (1984)786-1 番

ただ、この一点をもって、このコインを後代のものと断定するには、ためらいがある。何らかの記号の一部であるかも知れない。そこで、後代説は、とりあえず取り下げることにした。この銅貨と、同種の銅貨の画像は Göbl (1984)と Jongeward,et al.(2015)にある。その銅貨の画像と銘文と、ここに紹介する当館銅貨の画像と銘文との間に特段の矛盾はない。

3.表の図像

当館で所蔵する銅貨の表の図像は、人物自身から見て右斜め前を向いた立像である。田辺勝美編(1992)は「左手に三叉の戟を持ち、右手を拝火壇にかざす。」(177 頁)とする。Jongeward,et al.(2015)は「右手で小さな火の祭壇に供物を捧げている。」「左手で槍を持つ。」¹とする。画像だけからでは、三叉の戟なのか槍なのか、それとも長い笏(権威を象徴する)であるのか判別は困難である。問題は右手である。通常は、ゾロアスター教の象徴とされる拝火壇に手をかざす、もしくは供養を捧げるとされるが、私には“火桶”をぶら下げているように見える。これと類似した図像は、クシヤン朝の第3代王ヴィマ・カドフィセス発行の銅貨に見られる。左手は腰の辺りに置き、その横に棍棒を配する。問題の右手であ

¹ 「making an offering at a small fire altar with extended right hand」 「holds spear with left hand」
(共に 82 頁)

るが、拜火壇に手をかざす、もしくは供養を捧げる、もしくは“火桶”をぶら下げの、いずれとも解釈は可能である。この人物像であるが、代々のクシャン王家を表象したものが、それともカニシカ王自身であるのか、それを判断する情報を私は持っていない。

4.裏の図像

裏の図像は正面を向いたブツダの立像である。銘文は sakamano boydo とある。この銘文の理解については稿を改めて議論する。ここで問題としたいのは、左右の手の位置である。Göbl (1984)と Jongeward,et al.(2015)に掲載された画像を見ると、銅貨の立像には2種ある。下に画像を提示する。銅貨 A-1 と銅貨 A-2 は、両肘を鋭角に上にたたみ、左右の手のひらを胸の前に置く。銅貨 B-1 と銅貨 B-2 は、右肘を鋭角に上にたたみ手のひらを胸の前に置き、左肘は鈍角に下にさげ、手のひら（もしくは拳）を腰辺りに置く。左手の肘の角度が区別のポイントとなる。銅貨 B-1 は合掌しているように見えるが、左の手のひらのような部分は胴体と判断する。銅貨 A-1 と銅貨 A-2 は、合掌をしているように見えるが、手のひらがどのようなものであるか、その所作は明瞭ではない。当館所蔵のコインは、A タイプであるが、やはり手のひらの所作は明瞭ではない。参考までに大英博物館蔵の金貨のブツダ立像を提示する。金貨は、右の手のひらを、指先を上にして前方に向け肩の前あたりに置く²。左手は腰のあたりで何かを握る。銘文は boddo とある。



銅貨 A-1

Göbl(1984)786-1



銅貨 A-2

Göbl(1984)786-2



銅貨 B-1

Göbl(1984)787-2



銅貨 B-2

Jongeward(2015)616



金貨

大英博物館, IDC.289

² 田辺勝美編(1992:176)は、この右手を「施無畏印」とする。

どの様な理由から A タイプと B タイプの違いが生じたのか、それを知りたいところであるが、確かなことは何も言えない。考えが無いわけではないが当面は後の課題としておきたい。A タイプの手のひらの所作は明瞭で無いが、私は合掌である可能性は小さくないと思う。そこで、仮に合掌であるとする、どのように理解したらよいかを、次に述べておきたい。

5.銅貨 A を合掌と仮定した場合

先ず、当時の合掌が何を意味するか問題となる。当時のインドに於ける合掌が表わすものについては、中村元・早島鏡正訳(1963)『ミリンダ王の問い』に記述がある。当該書はインド西北一帯を支配したギリシア人の王メナンドロス（ミリンダはパーリ語の語形、在位は紀元前 155-紀元前 130 年）と、インドの仏僧ナーガセーナの対話である。原型は、紀元前 100 年から紀元前 50 年には成立していたとされる。なお、漢訳經典の『那先比丘経』（大正新修大蔵経第 32 卷）及びパーリ語經典の *Milindapañhā*（ミリンダ王の問い）として伝えられている。当該書に幾つか「合掌」の記述があるので、その一部を提示すると次の通り。

- ・「その家に托鉢にはいったが、一日といえども、わずか一匙の食、一杯の粥くの供養ささえも受けず、ただ一度の挨拶の言葉、合掌あるいは敬意も受けなかった。」（1 卷 14 頁）
- ・「ミリンダ王は夜が明け、太陽が昇ったとき、頭を洗い頭上に合掌して、過去・未来・現在における完全にさとった人々（諸仏）を憶念してから、八カ条の誓戒を守ろうと誓って自らこう言った。」（1 卷 272 頁）。

これによると合掌は、尊崇の対象に向けての所作である。そうであるならば、銅貨 A のような、尊崇の対象であるブッダ自身が手のひらを合わせる所作は異様にうつる。何らかの説明が必要となる。私は、インド文化の象徴として合掌という所作を利用した、と考える。どういうことかと言うと、カニシカ 1 世発行のコインの裏には、さまざまな神の図像が描かれている。Jongeward, et al.(2015)によると、*nana*, *oēšo*, *ēlios*, *athšo*, *miiro*, *mao*, *nanašao*, *manaobago*, *orlagno*, *mioro*, *oado*, *sakamano boydo*, *mētrago boydo* があり、Göbl (1984)や大英博物館には *boddo* がある。その諸神の内の 1 つとしてブッダを採用し、インドの神であることを合掌という所作で明示した。それが銅貨 A の図像であるとみる。

【参考文献（発行年順）】

- 中村元・早島鏡正訳(1963)(1964) 『ミリンダ王の問い』（東洋文庫）第 1,2,3 卷，平凡社。
荻原雲来・辻直四郎(1979) 『漢訳対照 梵和大辞典』新文豊出版公司、1979 年影印。
Göbl, R. (1984) *System und Chronologie der Münzprägung des Kušanreiches*. Vienna: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

- Sims-Williams, N. (1988) "Bactrian Language" *Encyclopaedia Iranica*. III/4, London and New York, pp.344-349.
- Sims-Williams, N. (1989) "Bactrian" In: R.S. Chitt (ed.) *Compendium Linguarum Iranicarum*, Wiesbaden: Reichert, pp.230-235.
- 季羨林(1990)「再談“浮屠”與“佛”」『*歴史研究*』1990年第2期。朱慶之編(2009)『*佛教漢語研究*』商務印書館に転載されたものによる。
- 田辺勝美編(1992)『[平山コレクション]シルクロードのコイン』講談社。
- 水野弘元(1994)『*パーリ語辞典*〈二訂版〉』春秋社。
- Sims-Williams, N. & J. Cribb (1996) "A New Bactrian Inscription of Kanishka the Great", *Silk Road Art and Archaeology* 4, 75-142.
- Salomon, R. (1998) *Indian Epigraphy. A Guide to the Study of Inscriptions in Sanskrit, Prakrit, and the Other Indo-Aryan Languages*, Oxford University Press.
- Glass, Andrew (2000) *A Preliminary Study of Kharoṣṭhī Manuscript Paleography*. Masters Thesis. Department of Asian languages and Literature, The University of Washington.
- 水野弘元(2000)『*パーリ語文法*』山喜房佛書林。初版1955年。第10版2000年による。
- 松本克己(2001)「ギリシア文字」『*言語学大辞典 別巻 世界文字辞典*』三省堂、321-333頁。
- Sims-Williams, N. (2007) *Bactrian Documents: From Northern Afghanistan II Letters and Buddhist Texts* (Studies in the Khalili Collections), The Nour Foundation in association with Azimuth Editions.
- Salomon, R. (2008) *Two Gāndhārī Manuscripts of the Songs of Lake Anavatapta (Anavatapta-gāthā)*, University of Washington Press.
- Gholami, Saloumeh(2014) *Selected Features of Bactrian Grammar*. Harrassowitz Verlag · Wiesbaden.
- Jongeward, D. and Cribb, J. with Donovan, P. (2015) *Kushan, Kushano-Sasanian, and Kidarite coins : a catalogue of coins from the American Numismatic Society*. American Numismatic Society.
- 吉池孝一(2016)「二言語併用貨幣の伝播 —ギリシア系バクトリア王国からクシャーン朝まで—」『*KOTONOHA*』第158号(2016年1月)、1-6頁。
- 吉池孝一(2016)「クシャーン朝仏陀立像コインの真贋について」『*KOTONOHA*』第159号(2016年2月)、46-48頁。
- 中村雅之(2018)「ギリシア文字の/w/——クシャーン王 Vima Kadphises の表記」『*KOTONOHA*』第193号(2018年12月)、1-2頁。
- Koichi Yoshiike(2020)“Who is Yan-gao-zhen 閻膏珍 in the *Later Han Chronicle*?”『*東洋哲学研究所紀要*』第35号、107-117頁。
- 吉池孝一(2026)「バクトリア語音/s/を音写する後漢の漢字音について」『*KOTONOHA*』第281号(2026年4月)、110-118頁。